いのちの歌

三好京三

いのちの歌

三好京三

文藝春秋

著者略歴

昭和六年岩手県に生れる。慶応義塾大学文学部国文学科(通信教育)卒。昭和五十年、「子育てごっこ」で第四十一回文學界新人賞受賞後、昭和五十二年、同作で第七十六回直木賞受賞。著書に「子育てごっこ」「分校日記」「キャンバスの雨」等がある。

いのちの歌

昭和五十五年六月三十日　第一刷

定価　一千百円

著者　三好京三（みよしきょうぞう）

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　(〇三)二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©KYŌZŌ MIYOSHI 1980

Printed in Japan

いのちの歌

装釘　田澤　茂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

一

暗闇の中で目ざめ、千代はあわてた。眠るつもりはなかった。

音を気づかいながら石油ランプに火を入れた。部屋を一つへだて、鉤型に折れた奥の蚕室に寝ている継母のサヨに、さとられてはならなかった。柱時計を見ると十二時をわずかにまわったばかりである。時計の音で目がさめたのかも知れない。

隣の床で寝ていた父親の米吉の鼾が消えた。見ると大きな眼をぎょろりとあいて千代をみつめている。千代がうなずいて見せると、よし、と言うように首を動かした。鼻梁の高いがっしりした顔の父親であった。以前は岩手・青森・秋田を歩きまわり、山を買っては材木を東京に送り出す仕事をしていた。今はこの岩手県九戸郡侍浜（さむらいはま）村におちつき、焼子に炭を焼かせている。若いころは相撲が強かった。

千代は、枕元にととのえて置いた風呂敷包みに手をかけた。それには千代と、千代の逃走を手伝う人夫のための、二食分の飯が入っていた。着替えや蒲団類は、継母の目をぬすみ、父親がすでに先方に送っている。

風呂敷包みを斜に背負おうとしたとき、トントントンと物音が聞こえた。千代の家では、家族の着物を作るため、継母の部屋に蚕をおいていた。そこに継母と二歳下の妹の由美が寝泊りし、継母が部屋の温度調節や、夜中の蚕の餌つくりをしている。今、蚕室では、起き上がった継母が桑の葉を刻み始めたのだ。

千代は一度手にした荷物を下に置いた。草鞋のように紐をつけた藁草履もそこには並べている。それから提灯、赤い角巻。一日中吹き荒れた野分は夕刻におさまっていたが、代わりに雨が降り出している。傘で遠道は歩けないから、角巻をかぶることにしたのだ。

包丁の音は十分ほどでおさまった。そのあとしばらく待ってから、千代は草履を素足にはいた。座敷で草履をはくのは死人を送るときだけだから、裏口から出るときにするつもりであったが、部屋を出てからそのようなことで時間をとるのはまずいと思い直していた。風呂敷包みを背負い、角巻を頭からかぶった。提灯のろうそくに火をつけた。

米吉が起き上がり、長押につるして置いた雌雄の雉子をとった。米吉が野分の中を猟に出かけ、仕止めて来たものだった。

「八戸の伯母の家ッの土産だ。人夫の酉蔵に持ってもらえ」

かぶった角巻をおさえた手に、二羽の雉子はずっしりと重かった。この日米吉は、風で落ちた柴栗を三升ほど拾って来て、下働きの者に栗飯を炊かせている。父親のひそかな門出の祝いなのだと思い、千代は食べながら涙をかくすのに困った。

米吉は目ざめているかも知れない継母に聞かせたげに、わざと障子を乱暴に引き開けた。そし

て、大きく咳払いをした。米吉の目まぜを見て、千代は廊下に出た。裏口のまわし戸のところまで、千代は足音をしのばせ、米吉は大袈裟に床板を踏み鳴らして歩いた。

まわし戸をそっと押し、物置の土間に降り立って、千代は父親をふり仰いだ。米吉は寝酒のまださめない赤銅色の顔をほころばし、少し口を動かした。

「しっかりやれ」

と言ったようだった。昔、草相撲の大関を張った父親が、たのもしく、ありがたく思われた。

物置から外に出る戸は引戸になっている。そこは前もってあけておいたから、音をたてる気づかいはなかった。

しかし、物置から少し離れたところが犬小屋になっている。千代は犬が嫌いで、父親の猟犬をかまってやったことがなかった。やはり深夜の人影を怪しんだ犬は、小屋の中でうなり始めた。吠えるかも知れないと、千代は身のちぢむ思いがした。

「クマ！」

そのとき米吉の声が厠の方でした。うなり声に気づいた米吉が犬を制したのだった。クマはおとなしくなった。

角巻に雨が降りかかり、重い音をたてた。提灯を角巻の中に入れてかかえ、千代は薪小屋をまわった。街道に出るには、継母と妹の寝ている蚕室のそばを通らなければならなかった。しかし、雨が音をたてて降りしきっており、足を速めても、足音の聞こえる心配はない。

一町ほどで道ばたにがっしりした門を構えている庄屋があった。千代はそこで一瞬足を止め、

奥をすかし見た。人の気配があるはずはなかった。
思いをふり切るように首を振り、千代はすぐに歩き始めた。十六歳になる千代が、淡い思いを寄せている医学生が、その庄屋にはいたのだった。もちろん、今は九月の末だから、医学生の健二郎は、仙台かも知れない。千代が垣間見るのは、庭先をゆっくり歩きながら、書物を読んでいる白絣の着物に袴姿の健二郎であった。
庄屋を過ぎると、長い石段のある八幡神社だった。千代はその石段をのぼり始めた。迂回している街道の、そこは近道になっていた。
石段をのぼり切り、拝殿に千代は深々と頭をさげた。小学校一年の夏、村人たちは何度もここに集まり、神官と共に、明治天皇の病気平癒の祈願をした。亡くなった祖母に連れられ、千代も村人の群れの中にうずまって平伏したのを覚えている。
社(やしろ)の裏手がこんもりした杉林で、その中を小道が通っていた。林に入ると雨の音は消えたが、代わりに大きな雫がときたま角巻に音をたてた。
濡れた道を、前の方からひたひたと歩いて来る者があった。待ちかねて人夫の酉蔵が迎えに来たのかと思った。その男は提灯を持っていなかった。男は近づくと無遠慮に顔をのぞきこんだ。
「なんだ、元村の千代さんでねえか」
下から提灯の光を浴びた男の顔は酉蔵ではなかった。元村と隣り合わせの、外屋敷という集落の平助という若者だった。
黙って通り過ぎようとすると、

「待て」
と若者は言った。
「何の用でござんす？」
固い声で千代は訊き返した。気がせいていた。
「千代さん、今ごろどこゃ行く。女の夜這いか？」
「おかしなことは言わないで呉なんせ。急ぎの用ができあんした」
「俺ァ、夜這いの帰りだが、千代さん。いっとき八幡様の社でどうだ。今夜は、首尾がうまくなかった」
「人を小馬鹿にして！」
千代は平助を突きのけるようにして歩き出した。平助はその千代の腕を角巻の上から押えた。提灯がはげしく揺れた。
「なあ、千代さん」
平助は野卑な眼つきでせまった。
「おらァ、そんな女ゴでは無ござんす」
もう一度振り切ると、
「それではいい」
と平助はすぐに弱気な声になった。
「その代わり、あしたァ誰にも俺が夜這いに歩いていたことを、言わないで呉るんだ」

「言わなござんす」
急ぎ足に歩き出すと、今度は追って来なかった。
——言いたいったって、あしたはおら八戸だ——
と思っていた。
杉林の小道は長くうねうねと続いていた。紐で足首を結んだ草履は、すでにじっとりと水を含んで重くなっている。
今の男がもし健二郎さんだったら、と千代は歩きながら思った。しかし、そんなことをする人ではないと、自分のみだらな想像が恥ずかしく、ふと、濡れそぼった頬の火照る思いがした。
継母のサヨは、五年前、米吉の二度目の妻として千代の家に入ったとたん、
「由美の方がいい顔をしている」
とあからさまに言った。妹の由美は父親に似て眼が大きく、色白で頬がほんのり赤かった。派手な顔立ちの由美を一目で好きになった継母は、派手好きな女だろうと千代は思った。米吉のところへ来る前に、三度よそに嫁入り、そのたびに亭主に死に別れた女であった。
サヨはいつも由美ばかりを連れ歩いた。そしてこの子は顔ばかりではない、頭も良いと自慢した。
「その代わり、姉の方は足りなくて足りなくて、笑うときはのどの奥までおっぴろげるし……」
千代は、それでもおら、優等にならなかった年はないと思いながら聞いた。笑うときは口をかくすようにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

由美だけを猫っかわいがりにするのを見て、千代を気の毒に思う近所の者もあった。そういう者たちは、

「千代さんだってかしこいし、日本風の美人でござんすこと」

と言ってくれた。千代は死んだ実の母親似なのか眼が一重で切れ長だった。瓜実顔で色は由美に負けず白かったが、やや青みがかっていた。

「その上おとなしくて働き者で……」

するとサヨは、少し眼尻の垂れさがった団栗のような眼で千代を見下しながら、

「なあに、おとなしい猫の方ァ、鼠を取りあんすんだ」

と言った。自分が実はあばずれだと言いふらされた気がして、子供心に千代は恥ずかしかった。そして、心中深く、自分は男とは金輪際かかわりは持つまい、と思った。

だから、庄屋の健二郎への思いは、つとめておさえていた。面影が浮かんでもふり払うように努力した。恋だと思いつめなければ、それで済むような感情であった。

サヨは、千代が嫌いなくせに、あるいは嫌いだからなおさらのことなのか、以前自分が嫁入った先の農家の末っ子を、婿に迎える心づもりであった。千代が高等科を出ると、

「清六はいい子だ。気持がおちついているし、腕はいいし」

とよく言っては、千代をうかがい見るようにした。清六は前の家の先妻の子であったがそこでも清六だけを偏愛したのかも知れない。千代は清六に逢ったことは、むろん一度もなかった。噂では、背が五尺そこそこの小男で、東京で床屋をしているということであった。千代は五尺一寸

あり、小学校では組で一番大きかった。
この夏、高等科二年の由美は、東京へサヨと行って来た。来年入る師範学校の下見をするためだった。由美は頭がずば抜けているし、東京の親戚に寄宿させ、いい師範学校を出したいというのが、サヨの考えだった。
米吉は明治の終わり頃に、汽船で深川に送った木材が津波で流され、大打撃を受けていたが、材木商をやめてから、焼子を使って炭を焼かせ、まだ由美を東京の学校にあげるていどの資力は持っていた。広い家は旅館を兼ねていた。
その由美が東京から帰って来た翌日、二人は野いちご摘みに出かけた。その道すがら、由美はませた口ぶりで、
「清六さん、女の人と同棲しているらしい」
と告げた。千代はあまり驚きはしなかった。サヨが気に入るような男が、自分の気に入るはずがないと思っていた。初めから、意地でも清六と一緒になるつもりはなかったが、由美のことばを聞いて、決心がついた。
「由美さん、おら、逃げる」
「どこッ？　姉さん」
由美は大きい目をますます丸くした。
「盛岡ッ。矢来先生の弟さんが、盛岡で産婆看護婦学校をやってるから」
矢来先生というのは高等科の受持ちの教師で、ときどき家に風呂をもらいに来ていた。

「姉さん、産婆になるの？」
「うん。おら、一生ひとりで暮すのだから、家でできる仕事をいっしょうけんめい考えたのす。矢来先生にも相談したら、いつでも世話をしてやるって……」
「継母さんは反対するね」
由美もサヨが姉に対して邪慳なのをよくよく知っていた。
「継母さんには絶対内緒だよ」
このときだけ千代はきつい眼で妹をにらんで念を押した。
杉林を出て街道におりると、波の音が聞こえた。やはり海は荒れているのだった。しばらく行くと火が見えた。人夫の家の軒先であった。酉蔵はそこで焚火をして待っていた。
「遅れて申し訳ありあせん」
千代は詫び、腕がしびれるほど重くなっていた二羽の雉子を渡した。
「しかし、姐さんも、よく覚悟を決めたもんだ」
合羽をかぶり直し、草鞋をはいた足で焚火を踏み消しながら酉蔵はつぶやいた。父親と同じ五十五歳の猫背の男だった。
歩き出してから、酉蔵は、
「姐さん、ろうそくァ、何本持って来あんした？」
と訊いた。
「これだけでござんす」

「それでは間に合わねえ」
酉蔵はあきれた声を出した。
「夜が明けるまではよっぽどある。三本も持たねえば」
取り返しのつかないことをしたと千代は思った。何日も前から準備をし、取り落ちはないと思っていたのだが、とんでもない失態があったのだ。
「姐さん、金は持っていますべえ」
懐の中に、父親からもらった百円と、わずかな小銭がはいっている。
「でも、あけている店はどこにもなござんすべ」
と千代は心細かった。
「いや、中野に行けば、一本木店(みせ)でァ、まだ人が酒を飲んでいるかも知れねえ。そこで買い足しあんすべ」
酉蔵はそう言って歩を速めた。世情にくわしい酉蔵が、にわかに心強く思われた。
中野村は、千代の村の侍浜と隣り合わせていた。その一本木店までは一里半とのことだった。
雨は降り続け、二人をのみこむような漆黒があたりを蔽っていた。雨の音がことさらに激しく聞こえるのは、道ばたに笹藪があるときだった。
雑木林、松林、薄の原野と通りぬけ、急な坂をおりたところで渓流の音を聞いた。侍浜村と中野村との境の高家(こうげ)川だった。提灯をのぞくと、ろうそくはずいぶんと背丈をちぢめていた。気がせいて、中野村に入った上り坂を、千代は前かがみになって急いだ。

人家のあるあたりまで行くと、前方に灯りが見えた。
「やっぱり一本木店ァ起きている」
酉蔵は抑揚のない声で言った。
店の近くで千代は駈け出した。今にも店の灯りが消えそうに思われた。
戸を開けて踏みこもうとして、千代は思わず後退りした。店の大きな炉端をかこんでいる男たちの顔が、鬼のように赤く異様に見えたのだ。深夜まで酒を飲み続けているのだから、人間の形相ではなくなっている。
おびえた顔の千代に代わって酉蔵が店に入った。千代はその背中をたたいて小銭をわたした。酔いどれたちはまた酒を飲み、ざわめき始めた。何を言っているのか、全く聞きとることができない。近隣で、どういうわけか中野村だけが奇妙な訛があった。磯浜だけで港に向くような入江もなく、海岸なのに漁師の少ない山村であるため、同じ三陸沿いでもこの村だけがよそとの交流が少なかったのかも知れない。
聞きとれないことばを話している中野村の酔いどれたちは、外に立っている千代にはいよいよ鬼のように思われた。
ろうそくを二本買い足した一本木店から一里ほど歩くと、右手が急にひらけたのが風と潮のにおいでわかった。潮騒がしぶきを吹きかけんばかりに大きくひびいた。
「小子内浜(おこないはま)だな」
酉蔵が波の音を縫ってつぶやいた。三陸沿岸は磯浜が大部分なのだが、それの北限の砂浜の多

いところであった。
「姐(あね)さん、疲れあんせんか？」
「いいえ」
草履の緒が足をきつくしめつけ、痛くなっていた。しかし、疲れはなかった。緊張して歩いているせいか、肩だけがこわばっていた。
丘を越え、浜に出、また丘になりして、砂浜が大らかな海岸線の弧をえがく、大浜というところで白々明けになった。淡い、墨色の岬が砂浜の向こうに突き出ていた。雨はいつの間にかあがっていた。
「休みあんすか」
酉蔵は言って道から砂浜に入りこんだ。そして太い流木をかかえて来て席をつくった。
「寒くながんすか、姐さん」
「いいえ」
むしろ汗で体がぬめっていた。千代は雨がやんでもなお、引きかぶっていた角巻をぬいで、そばに置いた。
「草履をぬいだ方がようごあんす」
すすめられて紐に手をやった。手がなまり、水気を吸って食い入った紐の結び目は、なかなか解けなかった。足元にかがみこんで酉蔵がほどいてくれた。
千代は握り飯を酉蔵に手渡した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook